私たちと発達保障

実践、生活、学びのために

京都教育大学　丸山啓史

◆第４回　安心できる関係

学童保育での様子からみえてくる子どもたちの思いは、多くの小学生に共通するものなのではないでしょうか。もっといえば、より年長の子どもたちや、私たち大人にも、共通しているかもしれません。

まるやま　けいし／1980年生まれ。京都教育大学准教授、全障研常任全国委員・京都支部長。専門は障害者教育学。著書に『発達保障ってなに？』（全障研出版部、共著）など。

関わりを求める子どもたち

数年前になりますが、学童保育の指導員さんに子どもたちの「気になる様子」についてのアンケートをお願いしたことがあります。その結果、「過剰に甘える（大人に関わりを求める）子ども」が「多くいる」と感じている指導員さんが少なくないことが浮かびあがってきました。

自由記述欄のなかには、「〝自分が、自分が〟の子どもが増えている（愛情を求めている）」「〝私だけをみて。ほかの子なんてほっといたらいいやん〟の子がいる」「甘えたい、話を聞いてほしい。そのような思いを素直に出せず、大人を試すようなアピール行動がある」「問題のある行動を起こすとき、受けとめてもらいたい、認めてもらいたい気持ちの裏返しにみえる」といった回答がありました。

アンケートは、いわゆる「気になる子ども」をめぐる実態と課題を知るためのものでした。「指示や連絡が伝わりにくい子ども」「他の子どもとの衝突が多い子ども」などについての回答が多くなることは予想していました。しかし、それらに劣らず、「過剰に甘える子ども」についての回答があったのです。そのことが、僕にとっては印象的でした。

宿題を理由にして

学童保育でアルバイトをしている学生から、こんな話を聞いたこともあります。

学校の宿題について、学童保育に来ている子が、「これ、どうやるの？」と質問をしてくるというのです。けれども、それはどうも、宿題が難しくてわからないからではないらしい。指導員と話がしたい、関わりたいという気持ちがあるようにみえる。たくさんの子どもがいる学童保育であっても、宿題を理由にすれば、指導員を独りじめできるというわけです。

一方、別のある子は、学校の宿題を学童保育でしたがらなかったといいます。理由を指導員さんが尋ねると、その子は、「お母さんとしたいから」と答えます。宿題ということであれば、忙しいなかでも母親が付き合ってくれる。そう思っているらしいというのです。

「障害児の役をやりたい」

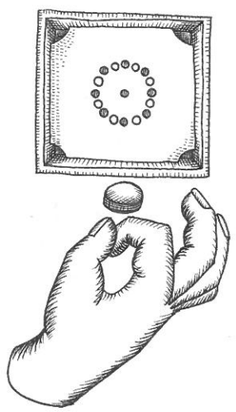
ある学童保育の指導員さんからは、ある子が「障害児の役をやりたい」と言ったことにショックを受けたと聞きました。ままごとのような遊びのなかでの発言だそうです。僕は、それがどういう意味でショックな発言なのか、しばらくわかりませんでした。

詳しく話を聞いて理解したのは、こういうことです。その学童保育には、障害のある子どもも通っていて、加配の指導員が配置されており、障害のある子どもに丁寧に関わっている。「障害児の役をやりたい」と言った子からすれば、ちやほやされているようにみえる。自分も、あの子と同じように、ちやほやされたい。甘えたい。そういう気持ちが、「障害児の役をやりたい」という発言につながったのではないか。

この指導員さんの解釈が当たっているのかどうか、それはわかりません。ただ、指導員さんがそう考えるだけの理由があるということは、確かなように思います。

安心できる関係を

念のためにいうと、関わりを求める思いの強さや、受けとめてもらいたいという気持ちの大きさは、学童保育の子どもに特有のことだとは思っていません。両親が共働きだと子どもが寂しい思いをする…などと言いたいわけではありません。学童保育での様子からみえてくる子どもたちの思いは、多くの小学生に共通するものなのではないでしょうか。もっといえば、より年長の子どもたちや、私たち大人にも、共通しているかもしれません。

最近では自己肯定感について語られることがよくありますが、自己肯定感というよりも、もっと基本的な、安心感のようなものがとても大切になっているように感じます。それは、「この人は信頼できる」「ここに来るとほっとする」というような、人や場所との関係のなかで生まれる感覚です。「かけがえのない自分（オンリーワン）」かどうかはわからないけれど、とにかく大事にされていると感じられる関係、自己肯定感がもてない自分であることも含めて認めてもらえる関係が、そうした感覚につながっているのではないでしょうか。

茂木俊彦さんは、「安心できる関係」について、「子どもの側からみれば、大人によってつねに見守られており、自分をわかっても